

高麗の法を記し
鹿野園を著し春日野の起
郊の園なるを其の當
社の多し山をけり
なる白きなる題を可なり
くすのたまふも
西の大寺月沙を著す
浄法の宗も重樫の教も
聖のなるものなり
よはるるなり入唐後天
のなるなり
をらるるなり
思ふなり
山の大寺なり

伽耶の此道 雙拳の說法 雙
林の入滅 までとくを
石の整多か 本綿四年の
祇の告 時行を
きりて 時大
地震動する 界に
出現 人民 雷回
時大 地震動する 界に
集會 龍王 龍
五 跋陀龍 安伽羅 和修
者 德 龍 龍
法 百千 春 屬 連 地 波
淵 たる 法 其 妙 法 集
九十九

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、
二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、
三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、
三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、
四十一、
四十二、
四十三、
四十四、
四十五、
四十六、
四十七、
四十八、
四十九、
五十、
五十一、
五十二、
五十三、
五十四、
五十五、
五十六、
五十七、
五十八、
五十九、
六十、
六十一、
六十二、
六十三、
六十四、
六十五、
六十六、
六十七、
六十八、
六十九、
七十、
七十一、
七十二、
七十三、
七十四、
七十五、
七十六、
七十七、
七十八、
七十九、
八十、
八十一、
八十二、
八十三、
八十四、
八十五、
八十六、
八十七、
八十八、
八十九、
九十、
九十一、
九十二、
九十三、
九十四、
九十五、
九十六、
九十七、
九十八、
九十九、
一百、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、
二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、
三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、
三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、
四十一、
四十二、
四十三、
四十四、
四十五、
四十六、
四十七、
四十八、
四十九、
五十、
五十一、
五十二、
五十三、
五十四、
五十五、
五十六、
五十七、
五十八、
五十九、
六十、
六十一、
六十二、
六十三、
六十四、
六十五、
六十六、
六十七、
六十八、
六十九、
七十、
七十一、
七十二、
七十三、
七十四、
七十五、
七十六、
七十七、
七十八、
七十九、
八十、
八十一、
八十二、
八十三、
八十四、
八十五、
八十六、
八十七、
八十八、
八十九、
九十、
九十一、
九十二、
九十三、
九十四、
九十五、
九十六、
九十七、
九十八、
九十九、
一百、

定家

早備入道

山よりあふる雨くさくさ

つらつら 是は北園よりあふる雨

て依我もさかどかしく福も唯今都

より早冬をたねの衣は初まき

く雪も行く遠道の山又とて

て紅葉もあふなりあまのたの

きもあふく 御多う程は是は

上京ともよみ面白比は神無月十日

あり本は梢も冬枯く枝もあふ

紅葉の色もあふる野もあふ

きこくさあふるあふるあふる

雨はあふるあふるあふるあふる

あふるあふるあふるあふる

自然居士

早男云

是ハ東國方の人商人と云ハ我ハ往ハ
 教よりくむと云ハ人買取て下ク
 片時の暇と云ハ一と云ハ一と云ハ
 ゆふ子作らぬくハ本山雲居寺ハ自然
 居士の脱法也云ハ一と云ハ一と云ハ
 の所へ行てわらば後ハ出年わらば
 存ハく雲居寺造営の居士ハ脱法
 今自結願と云ハくあぢうと云ハ既時
 刻ハなりハ一と云ハ一と云ハ一と云ハ
 願の持持ハ一と云ハ一と云ハ一と云ハ
 教主釋迦牟尼寶号三世の諸佛
 十方代薩埵ハ申てあはくハ一と云ハ
 多般若心經ハあはくハ一と云ハ一と云ハ

自

Handwritten musical notation on the left page, consisting of a single staff with various notes and rests.

捨骨と確〜
Handwritten musical notation on the right page, consisting of a single staff with various notes and rests.

朝後の浪花底に沈むれば
下り入るるに早に
付く作先を御世に
とば披見ありし
亡母の事終るに
さめ其後を
白砂の埋き日月
たる我を
十二年
まじき
らん
精寂莫無人聲
をれば

天に祀別を
無垢世
浄法身具相三十二
嚴法
あり有
用
見皮龍女成佛
号一毎
おま
うけ

金札

ワキ三六日

抑是の極武天自まはくしあひは
 下よりさしむしは誠を回愛意教なり
 平はふたむしあひは回安今の
 砌なり回くは思し果ふたつて大
 宮作さちかき今一の勅意は紅き
 唯今や一とより下向はらまらるる
 うき久き神代より天地し
 帝一回のたまり天のよむと直
 成や名を二柱の神さあま
 國ははかりあひまはつた代はれは
 君の所うけおまきし時わき母
 ふたあひはまはつたの神さ
 未きかぬおはの直かきらるる

全

Handwritten musical notation on the right page, consisting of several staves with notes and clefs. The notation is dense and fills most of the page.

Handwritten musical notation on the left page, consisting of several staves with notes and clefs. The notation is dense and fills most of the page.

シテ男

感文

いたる屋敷の事は何の
 もなう今園へは
 清水乃方
 遊ばさるる
 仕事して作の東山さるる興
 南無大方意大慈乃
 観世音一切衆生を
 ちのせき一程念なむをの
 ありまも多年徳遇乃法結
 縁をさるる清めを
 念の清めを
 念の清めを
 念の清めを
 念の清めを

も思ふに聴聞の事なりては
有難や大慈大悲の菩薩の慈悲
業が能く善業の直道も願く
無縁の善業も我々の身に
今も此の善業も我々の身に
唯の我々の二世の修行も
大百の修行も善業も我々の身に
至難若修行欲求終念彼觀音力
修の壞も我々の修行も聴聞の事
天晴法命も我々の修行も
侍聽用は我々の修行も
王の修行も我々の修行も
我々の修行も我々の修行も
我々の修行も我々の修行も

一や我々の修行も我々の修行も
涌き出さるる種々諸悪趣地獄鬼
畜生老病死苦の漸悪令滅此又の
法も我々の修行も我々の修行も
の修行も我々の修行も我々の修行も
惜はるる我々の修行も我々の修行も
山も我々の修行も我々の修行も
一又我々の修行も我々の修行も
觀世音三世の利益も我々の修行も
我々の修行も我々の修行も我々の修行も
聖人の修行も我々の修行も我々の修行も
も我々の修行も我々の修行も我々の修行も
も我々の修行も我々の修行も我々の修行も
も我々の修行も我々の修行も我々の修行も
も我々の修行も我々の修行も我々の修行も

并筒

平傳句

是の一所に在るの僧より作られたる
 南都よりして其佛堂社ありて
 めりて又是より和歌指し
 是なる寺と入るに在る
 ちよちよとて其の事一見せむと
 常の息女を婦に侍りて
 常の風吹は仲津を流し田に
 詠みしを其の事とて
 昔の人の跡に其の事とて
 せり紀有るはつねに世に
 其の事とて其の事とて
 の水く月をみれば其の事とて

井

四十四

其の夜の人
 目も細く軒端の影の
 中を歩かぬ
 人の影も世の中
 一歩一歩の
 足音も
 西の空
 月も細く
 居てあな
 其の夜の人
 目も細く軒端の影の
 中を歩かぬ
 人の影も世の中
 一歩一歩の
 足音も
 西の空
 月も細く
 居てあな

其の夜の人
 目も細く軒端の影の
 中を歩かぬ
 人の影も世の中
 一歩一歩の
 足音も
 西の空
 月も細く
 居てあな

平信江

女郎花

是ハ九羽村浦方々也此僧少く

作柳葉心於さるる程に秋思

都く上るる程に浦の里の古

色々の葉の影の如くして

さるる程に秋の思の如くして

さるる程に秋の思の如くして

さるる程に秋の思の如くして

さるる程に秋の思の如くして

さるる程に秋の思の如くして

さるる程に秋の思の如くして

さるる程に秋の思の如くして

さるる程に秋の思の如くして

さるる程に秋の思の如くして

ちんちん新く 萬をきく男山
 榮行道 芳かきく 八月半に
 日神の 業ある 松原を 下りて
 久き 七月の 日の 男を くらげ
 けし ちんちん 万をきく 男山
 て 月を くらげ の 石清水 翁は 多も
 妙なる 業ある 松原を 下りて
 の 箱を 納め 翁の 神喜 多も
 かし 男地 万をきく 男山
 そし 翁を くらげ 法本 枝を くらげ
 たり 媽に 業ある 松原を 下りて
 世界を 全う 翁の 千里を 月
 の 夜を 翁の 玉垣を くらげ 翁
 ちんちん 万をきく 男山

下りて 翁を くらげ 石清水
 の 箱を 納め 翁の 神喜 多も
 かし 男地 万をきく 男山
 そし 翁を くらげ 法本 枝を くらげ
 たり 媽に 業ある 松原を 下りて
 世界を 全う 翁の 千里を 月
 の 夜を 翁の 玉垣を くらげ 翁
 ちんちん 万をきく 男山

生かす頼風の思ふを極新妻
 の女郎に似せたるをきりて
 なるくそのはたけをさか
 てきりてはたけをさか
 支のたれを魔のたれに
 昔もたれを魔のたれに
 水の泡を清くきりて
 編み物に似せたるをきりて
 水の泡を清くきりて
 編み物に似せたるをきりて
 水の泡を清くきりて
 編み物に似せたるをきりて

二巻の女塚に似せたるをきりて
 其塚は是れ我が家の
 吊るるるるるるるるる
 念ふるるるるるるるる
 念ふるるるるるるるる
 念ふるるるるるるるる
 念ふるるるるるるるる
 念ふるるるるるるるる
 念ふるるるるるるるる
 念ふるるるるるるるる
 念ふるるるるるるるる
 念ふるるるるるるるる
 念ふるるるるるるるる
 念ふるるるるるるるる
 念ふるるるるるるるる
 念ふるるるるるるるる

其ノ上ニ申ルルニハ
カキテハ 鳥ノ音ヲイフ
カキテハ 鳥ノ音ヲイフ
カキテハ 鳥ノ音ヲイフ
カキテハ 鳥ノ音ヲイフ
カキテハ 鳥ノ音ヲイフ
カキテハ 鳥ノ音ヲイフ
カキテハ 鳥ノ音ヲイフ
カキテハ 鳥ノ音ヲイフ
カキテハ 鳥ノ音ヲイフ
カキテハ 鳥ノ音ヲイフ

カキテハ 鳥ノ音ヲイフ
カキテハ 鳥ノ音ヲイフ
カキテハ 鳥ノ音ヲイフ
カキテハ 鳥ノ音ヲイフ
カキテハ 鳥ノ音ヲイフ
カキテハ 鳥ノ音ヲイフ
カキテハ 鳥ノ音ヲイフ
カキテハ 鳥ノ音ヲイフ
カキテハ 鳥ノ音ヲイフ
カキテハ 鳥ノ音ヲイフ

東方朔

東方朔

面白を四時シのシりシかシくシきシんシんシ

夏ニ今ニもニ初ニ秋ニのニ旨ニ文ニはニ果ニ

のニ多ニ急ニなニりニはニ座ニのニ極ニ光ニ

殿ニ軍ニ屯ニのニ教ニをニ来ニしニ上ニ賓ニのニ書ニ

金銀ニのニ床ニをニ君ニとニさニりニなニりニ官ニ

人ニのニくニ益ニ居ニりニはニ持ニとニりニ

てニあニりニくニたニりニなニりニ其ニ其ニくニ

たニかニらニんニ持ニ見ニ城ニ也ニ是ニもニりニんニたニ西ニ

たニかニらニんニ唯ニ是ニ君ニにニはニ戦ニさニんニんニたニ東ニ

こニのニ多ニ急ニなニりニはニ座ニのニ極ニ光ニ

たニかニらニんニ唯ニ是ニ君ニにニはニ戦ニさニんニんニたニ東ニ

たニかニらニんニ唯ニ是ニ君ニにニはニ戦ニさニんニんニたニ東ニ

たニかニらニんニ唯ニ是ニ君ニにニはニ戦ニさニんニんニたニ東ニ

東

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、
二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、
三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、
三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、
四十一、
四十二、
四十三、
四十四、
四十五、
四十六、
四十七、
四十八、
四十九、
五十、
五十一、
五十二、
五十三、
五十四、
五十五、
五十六、
五十七、
五十八、
五十九、
六十、
六十一、
六十二、
六十三、
六十四、
六十五、
六十六、
六十七、
六十八、
六十九、
七十、
七十一、
七十二、
七十三、
七十四、
七十五、
七十六、
七十七、
七十八、
七十九、
八十、
八十一、
八十二、
八十三、
八十四、
八十五、
八十六、
八十七、
八十八、
八十九、
九十、
九十一、
九十二、
九十三、
九十四、
九十五、
九十六、
九十七、
九十八、
九十九、
一百、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、
二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、
三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、
三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、
四十一、
四十二、
四十三、
四十四、
四十五、
四十六、
四十七、
四十八、
四十九、
五十、
五十一、
五十二、
五十三、
五十四、
五十五、
五十六、
五十七、
五十八、
五十九、
六十、
六十一、
六十二、
六十三、
六十四、
六十五、
六十六、
六十七、
六十八、
六十九、
七十、
七十一、
七十二、
七十三、
七十四、
七十五、
七十六、
七十七、
七十八、
七十九、
八十、
八十一、
八十二、
八十三、
八十四、
八十五、
八十六、
八十七、
八十八、
八十九、
九十、
九十一、
九十二、
九十三、
九十四、
九十五、
九十六、
九十七、
九十八、
九十九、
一百、

騎恩の二五の例なり。其平くを
かゝりて毎人一人かゝる人
豊ひて其平位を飾りおし
さるるに供の人敷りたるを先
一番より 田代殿 二番より 新
用の次第 又三番より 中
四番より 佐方 五番より 出番
は 司 可 船 儀 等
あり 舟人 君内 舟 龍 原 舟
ち ち 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
命 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
色 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
なる 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
と 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

よく豊せらるり 園家殿 舟 舟 舟
おし 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
より 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
さる 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
中一の若舟なる人 君内 舟 舟 舟
く 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
て 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
ち 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
たる 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

和田が野口... 何れも和
田殿の... 其相司... 其為
の... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...

和... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...
其... 其... 其...

給くがはにむと休め給くを早夜
よぐとちかむと動ささめしする
あくは 清動さるる群を物々
あむらりあむらあり動れは序の初を
加括とたひひく 新里の初を
よぐとちかむと動ささめしする
あむらりあむらあり動れは序の初を
加括とたひひく 新里の初を
よぐとちかむと動ささめしする
あむらりあむらあり動れは序の初を
加括とたひひく 新里の初を

うぐとちかむと動ささめしする
あむらりあむらあり動れは序の初を
加括とたひひく 新里の初を
よぐとちかむと動ささめしする
あむらりあむらあり動れは序の初を
加括とたひひく 新里の初を
よぐとちかむと動ささめしする
あむらりあむらあり動れは序の初を
加括とたひひく 新里の初を
よぐとちかむと動ささめしする
あむらりあむらあり動れは序の初を
加括とたひひく 新里の初を

乃こころの法味をあらて終夜彼
 りこころの神意をあらたされ
 ひきすまへ一心散礼の
 時のよもまかりかえりし
 あつむの心くかまの心り
 心覺の月よたあは法性如の
 實の心法まじりてあま
 だまじりてかまのま
 かのまおののの
 己如神の神まありま
 えきまのりてあま
 しくまのりてあま
 衣是れは金明の業
 かのまのりてあま

熱の神まありてあま
 ままのりてあま
 の徳あはれ月まありてあま
 れま神神まありてあま
 のままのりてあま
 危吉野の山ありてあま
 なるまのりてあま
 あまのりてあま
 舞まありてあま
 高天のりてあま
 天のりてあま
 向くまありてあま
 ままのりてあま

祢のつらからんが
さゆわゆるも清海を清
まもさるゝわらげぬ
わつたのらま
老後の若きより
のらまをい

望月

しち男詞

是ハ信濃國住人安田の庄日友治の
庄内よりて小治の刑部友房と申
者こそはねを頼りてなり友治を
は弟は家司の論一もなうけ
終つては其おとらに東京は住
元事つてはねをい同は
て本國ノ羅ふもい其おとら
は申す申す本國も
守出の者も甲をい
の路人の通りの
なは波をい馬
あし

歌

四十四

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is dense and fills most of the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is dense and fills most of the page.

Small handwritten mark or characters.

Small handwritten mark or characters.

口幸信河

善知鳥

是者諸國一見老僧とて其教を
 立山禪定中しんかんとて今
 おんくしんかんとて申すは
 のんかんとて申すは
 ぬんかんとて申すは
 あんかんとて申すは
 もんかんとて申すは
 せんかんとて申すは
 ちんかんとて申すは
 のんかんとて申すは
 方んかんとて申すは
 ねんかんとて申すは

344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400

401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450

Handwritten text in a cursive script, likely a list or journal entry. The text is written vertically and includes various characters and symbols, possibly representing a collection of items or a detailed record.

Handwritten text in a cursive script, similar to the adjacent page. It appears to be a continuation of the list or journal entry, with vertical lines of text.

早三春彦

号服

道乃みらるる時とてや

豊あふらん 抑是の當今より

まの臣下也我を頼み授け任吉れ明神

よ美の體とてよふきふてよてよ程よ

是より浦傳心よ西宮にまの号服の

里ももつらうとまの教へるる

在候早任の江を長國に法れあさ

かすく玉藻外を教へあま人のるも

直ち難波をの行方若らるも名程

得る号服の里に若らるる

程はは國号服の里に若らるる

松原はあつらへて裁物の着れ國よ

越後をのなる舞号服とて若れ

のは守らるゝ異國に勅使并國より
 免くきり給ひしあぢ女にあや
 女歸そそく萬里の蒼波を渡り來て
 西日け残りあけさしもの里におも
 ひ連累まらざる様子の錦衣をりく
 凌の衣をきる勅使奏覧有りける
 敬感する甚しき方り名付し哀龍
 の名衣を文にあらたまひ山鳩を
 さらしけし氣色きたり雪鳥を
 さらしきたるやまあかきころり
 きたるはまらる方代はたふは油
 なまらばはななり有らう異服の文
 字をなまらばはななり有らう
 名付きたるはまらる方代はたふは油

凌の錦衣の衣をきる勅使奏覧有りける
 敬感する甚しき方り名付し哀龍
 の名衣を文にあらたまひ山鳩を
 さらしけし氣色きたり雪鳥を
 さらしきたるやまあかきころり
 きたるはまらる方代はたふは油
 なまらばはななり有らう異服の文
 字をなまらばはななり有らう
 名付きたるはまらる方代はたふは油
 君の油を捨るやまあかきころり
 勅使奏覧有りける敬感する甚し
 時を過ぎるやまあかきころり
 らくはななり有らう異服の文
 なまらばはななり有らう異服の文
 字をなまらばはななり有らう
 名付きたるはまらる方代はたふは油

羽衣まればまゝながりもつらぬいふ
あふまゝも世もちうを松の葉の
散らせすしてまゝに薜れ草も
代の例よひも後乃故くも
ある時代よもみ君の賢き世も
ほまぢつてまゝに機ねおと 錦衣
ねる機杼の中も相思乃字を
夜よ砧のうま悲別れ松の風
よの磯うの波れ音 ねるこひまなき
機杼のうまわかれ葉の羊繰の糸
つらさるゝあやもみ木れあ
きりまゝにちもまゝにまゝに
うくとお悪魔もちもまゝに
るま織ねのうまの袖思ひ出

なせ七夕のうまに
の精果妙童昔を影向あり
よもまゝにだりて後を織そ
ありて我君も持物に代のため
二人乃後作もねあやま
くれ葉もあやまに油揚
うまにまゝにまゝに

放下僧

シ男初

是を^シ下野國^ノ住人^ト真本^ト聖^トした事^ヲ
 何^レ某^ノ子^トふ^ル小次郎^ト者^ト者^トて^シ相摸國^ノ住人^ト稱^ス
 親^クく^シふ^ル名^ヲ相摸國^ノ住人^ト稱^ス
 の信俊^ト討^テて作^ル我^ノ親^ノ敵^ト
 老事^ト所國^トお^シく其^ノ隱^キな^ル事^ヲ
 得^テた^ル者^ト持勢^ト我^ノ父^ト兄^トか^シ
 ら^シて^シな^ル事^ヲ思^フた^ル事^ヲな^ル事^ヲ
 兄^トか^シて^シ老^シき^ル事^ヲ思^フた^ル事^ヲ
 所^レて^シも^シは^シて^シ相摸國^ノ住人^ト稱^ス
 合^シて^シも^シは^シて^シ相摸國^ノ住人^ト稱^ス
 誰^レも^シは^シて^シ相摸國^ノ住人^ト稱^ス
 小治郎^ト殿^トの^シ事^ヲ思^フた^ル事^ヲ
 な^ル事^ヲ思^フた^ル事^ヲ思^フた^ル事^ヲ

の爲には世にすべき事 唯今ある事
餘無家あるに依り親の教養
よき國にたつて其の事なす
程よくして其の事なす
爲りて其の事なす 親
の教養よき事なす 其の事
かれは徳教の事なす 兄弟ありて
なき事なす 其の事なす
よき徳ありて其の事なす
老成を孝にす 其の事なす 親の
事なす 其の事なす 其の事なす
眞其の事なす 其の事なす
其行を以て其の事なす 其の事なす
其備は其の事なす 其の事なす

其の事なす 其の事なす 其の事なす
其の事なす 其の事なす 其の事なす
其の事なす 其の事なす 其の事なす
其の事なす 其の事なす 其の事なす
其の事なす 其の事なす 其の事なす
其の事なす 其の事なす 其の事なす
其の事なす 其の事なす 其の事なす
其の事なす 其の事なす 其の事なす
其の事なす 其の事なす 其の事なす
其の事なす 其の事なす 其の事なす
其の事なす 其の事なす 其の事なす
其の事なす 其の事なす 其の事なす

流氷の申作さすはたし物に法方の口
 名実の何れもそとくそくそ沙門
 としつて思得二辨の衣と云羅障
 懺悔に袈裟をつけ十力に教理に
 手は纏ひてこそ僧なるべしと云
 形れおしつて清きら又柱杖の團扇
 取つけくおびの團扇の一向あり
 こころに思得のやハ動く時に清風
 と出し静なる時ハ明月と云ん月
 清風唯回性諸法をびつ所地して
 心地修りの種をまゐる秋ありつら
 道にたよりさるゆゆそあるある
 團扇の百たつらるる也今一人を

弓箭の帯一持給ふ是もお信業
 道具と云ふは馬の馬の馬の馬の
 烏兔の形とを野へ定惠不二此
 秘法と表すはこれの愛染のまを神
 通乃らに習得せしむる四魔
 の軍を破り給ふはこれの四魔
 を破り給ふはこれの四魔を破り
 対するはこれの四魔を破り給ふ
 今こそ宗体の要の要の要の要の
 なりて宗体の要の要の要の要の
 をけしる組師禪佛の何れは傳入
 今こそ宗体の要の要の要の要の
 中へ教外別傳の何れは傳入

新編

浮舟

是れがわたりゆく世に曾ては移りて

八和別物の観音の集結に

今都へよこせりて文に

寄るべきは檜原の

島に

の舞を

乃

〜

舞

〜

〜

〜

12

四十四

Handwritten text in Arabic script, likely a transcription of a historical document or a religious text. The script is dense and fills most of the page.

Handwritten text in Arabic script, similar to the right page. It includes a prominent heading at the top: **事(光源氏の物語)**. The text is written in a cursive style with some diacritics.

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

法

百九十七

大慈大悲の

大慈大悲の

大慈大悲の

大慈大悲の

大慈大悲の

大慈大悲の

大慈大悲の

大慈大悲の

大慈大悲の

大慈大悲の

大慈大悲の

大慈大悲の

大慈大悲の

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに

かゝるに思ふに